はじめに

文化学園大学和装文化研究所は「アーカイブ中核拠点形成モデル事業」の一環として「服飾分野における未発掘資料の調査と管理状況の改善に向けた協力拠点形成事業」を進めて参りました。

ここでは、横断的アーカイブの整備を進めるにあたり必要となる資料所蔵館との連携の構築と各館データベースの現況調査、およびアーカイブ化手法の検討を進めました。とりわけ服飾分野資料の専門博物館として、情報整理の面で先進的な取り組みを進めている 2 館を訪問し、ヒアリング調査を行ないました。

また、アーカイブの充実には資料そのものの適切な維持管理が前提となることから、未だ広く知られていない個人所蔵の資料（以下、未発掘資料という）の所在確認と基礎的な調査を行ない、要請がなされた一部所蔵者に対しては管理状況の改善に向けた支援を行ないました。

ここでは、これらふたつの調査事業について、その概要を示すこととします。

事業報告

調査１：服飾専門博物館に対する協力要請とアーカイブ構築に関するヒアリング調査

●概要

調査対象館

公益財団法人 京都服飾文化研究財団

所在地：京都市下京区七条御所ノ内南町１０３

調査日：2016 年 2 月 25 日

公益財団法人 神戸市産業振興財団 神戸ファッション美術館

所在地：神戸市東灘区向洋町中２－９－１

調査日：2016 年 2 月 25 日

服飾資料の専門博物館である、京都服飾文化研究財団と神戸ファッション美術館を訪ねた。本事業の主旨を説明し、中核拠点形成に対する協力要請を行なった。

服飾資料の展示経験の豊富な 2 館に対するヒアリングでは、人数の限られる研究者を対象とするよりも、一般の利用者に向けて間口の広いアーカイブを作ることが望ましいとの意見があった。併せて、専門知識を持たないユーザーがアクセスし易い環境を整えることを通じて服飾資料への関心を呼び覚ましてゆくことも、専門施設の果たすべき責務であろうとの理解が示された。

●得られた成果と今後の課題

服飾資料の調査研究および展示の専門機関である公益財団法人京都服飾文化研究財団、公益財団法人神戸ファッション美術館においてヒアリング調査を行ない、両施設における資料のデータ化に対する高い関心を伺うことができた。今後の事業を進める上で大きな収穫となった。

・ヒアリングにより得られた意見

①所蔵品データベースの有無とその運営のあり方（抜粋）

・データベースは自館にてカスタマイズしたものを使用している。
・セキュリティ上の問題もあり、アクセスは特定の端末に限定している。
・公開しているのは所蔵資料の全てではなく一部である。
・データ件数を増やす必要性は感じるが、他業務との調整が困難である。
・公開データの精度を高めること（内容の間違い、区分上の矛盾の修正）が課題。
・英語表記への転換も随時進めたい。
・データベース内の画像の使用依頼が頻繁にあり、対応に苦慮している。

②横断的アーカイブの必要性と今後の課題として考えられること（抜粋）

・横断的アーカイブによりデータベース利用者が増えることは良いことである。
・現状では他館の運営するデータベースは使いづらいことが多い。
・分類と名称が館ごとに異なるため、検索がしづらい。
・項目や画像のとり方に共通理解がなく、必要な情報が得られない場合が多い。
・研究者のみならず、専門知識を持たない者も利用できる工夫が必要。

資料情報をデータ化し公開するにあたって踏まえるべき共通理解が、服飾分野においては未整理な部分が多く、「資料分類の方法」や「登録名称のつけ方」についても、館ごとに基準が作られ進められているとの認識を確認した。また資料の形状がそれぞれに異なることから、採寸の位置や写真の撮り方などについて統一的基準を作りづらいとの意見も聞かれた。

手法検討を進めるにあたり、まずは各館がどのように資料整理を行なっているかについて広く知ることが必要であることを認識するとともに、データ化に際し統一基準を設けるには克服すべき事柄が多いことを再確認した。これら事実を踏まえた上で、実現可能な手法を検討してゆくことが今後の課題であることを確認した。

調査２：未発掘資料に対する所在確認と調査

●概要

資料アーカイブの充実には、未だ広く知られていない資料についての所在確認と基礎的調査を行うことも必要である。この認識にもとづき、博物館・美術館に収蔵されず、広く知られていない資料を未発掘資料とし、特に明治時代から昭和戦前期にかけての服飾資料の調査を行った。

調査の対象を明治時代から昭和戦前期としたのは、この時代は服飾の歴史において意義のある時代と位置づけられるからである。明治時代から昭和戦前期は日本が近代化を進めた時代であり、服飾においても大きな転換期として捉えることができる。また、比較的新しい時代であることから、個人が当時の服飾資料を所蔵している場合も多くあると考えられることによる。

本調査では、本学と関係の深い機関に事業の主旨を説明し、その機関と繋がりのある所蔵者との仲介を依頼した。この他に所蔵者に直接働きかけた場合もあるが、8 件について調査を行った。

調査の内容は、資料名、寸法、使用されている材料、資料の状態などであり、合わせて写真撮影を行った。これにもとづき、個々の資料に関する調査票を作成したが、ここでは 3 件について概要を掲載する。

●得られた成果と今後の課題

今回は服飾資料 145 点、服飾関連資料 67 点を調査したが、その内容は多岐にわたる。調査の前に考えられたことではあるが、明治時代から昭和戦前期は日本が近代化を進めた時代であり、調査資料にも和装と洋装の両方の資料が認められた。そして、日本の洋装の歴史の中で初期に該当する明治時代のドレス 2 点を調査することができ、これはきわめて貴重な資料である。また、調査資料は衣類をはじめとし、帯、帯留、半襟、手袋、下着類などの服飾品なども多く含まれ、これらは服飾を総合的に理解するために有効である。調査資料の所用者は天皇・皇后から一般の人々までさまざまであり、近代天皇制のもとで宮中儀式に着用された男子大礼服 2 点も確認された。さらには、服飾そのものではないが、服飾の製作に関わる裁縫雛形なども調査した。

資料の調査にあたっては保存状態についても確認をし、良好とは言い難い状態も見受けられた。それぞれの資料の保存について、個人の所蔵者は適切な収納方法、収納具などについてよくわからないのは当然であり、収納スペースが確保できないなどの問題もあるように思われる。

今回の調査は、博物館、美術館に収蔵されていない未発掘資料を対象としたが、どこにどのような資料が所蔵されているのかの情報を得ることが難しかった。また、資料の保存についても適切なサポートが必要であることを痛感した。これら未発掘資料の調査や保存は文化財保存の観点はもとより、芸術文化資料の集積と公開という観点からも重要である。服飾分野のアーカイブの充実に向け、公費による未発掘資料の調査・保存がより広範囲に組織的に進められることが望ましいと考える。

謝辞

本事業で進めましたふたつの調査においては、多くの方々にご協力を頂きました。とりわけ未発掘資料の調査では快くご対応を頂き、ご自宅まで調査員を迎え入れて頂きました。末筆ながら謝意を表します。